

八重雲の里

～相原精次先生を偲んで～

1978年(昭和53年)4月から1988年(昭和63年)3月まで、国語科で主に古典の教鞭を取られていた相原精次先生が、昨年12月8日にご病気のため83歳でご逝去されました。表題の「八重雲の里」は、先生が教鞭を取られながら作家活動を始めた際に自費出版された短編集のタイトルであり、そこに収められた同名の小説の中で「神々の住むところ」として記されており、先生の墓碑にも刻まれているとのこと。

今回は、相原先生が金井高校に赴任されて最初に学級担任を務められた5期生の、3年次のクラスの方に先生の思い出についてエピソードを交えてご紹介いただきました。

私たちは1982年(昭和57年)3月に卒業した5期生で、相原先生は最終学年の3年12組の担任でした。先生の授業で思い出されるのは、枕草子や源氏物語などを新たに授業で取り上げる際には必ず「それではみんなで一緒に声を出して読みましょう。いち、にのさん、はい！」と全員で読まされたことです。源氏物語の冒頭「いづれの御時にか、女御、更衣あまたさぶらひたまひけるなかに、いとやむごとなき際にはあらぬが…」と先生の低音ボイスでモノマネをして、いつの間にか覚えてしまっていたのは、もしかしたら先生の思惑通りだったのかもしれませんが。また、先生がどなたか同僚の先生宅で飲んだ際、したたかお酒が回った先生が、墨汁と筆を借りて、そのお宅の障子だか襖だかに思いっきり字を書いてしまったという武勇伝(?)を話されて、クラスが笑いに包まれたことも記憶に残っています。

卒業後は先生とも疎遠となっていましたでしたが、いつだったか、5期生の有志で旭区の大池公園でBBQをした際、お声掛けしたら気軽にいらしていただいてお酒を飲みながら歓談させていただいた、というようなこともありました。

2012年(平成24年)10月には、卒業から30年経って初めてクラス会を開きました。当時は今のようにSNSも浸透しておらず、同窓会事務局からいただいた名簿を頼りに「往復はがき」を出しましたが、ほとんど宛先不明で戻ってきてしまいました。それでも都合がついた11名で、相原先生を囲んで楽しいひと時を過ごさせていただきました。その際には、先生は古墳に関する本を執筆中だとお話しされていました。

そして、私たちも2023年度には還暦を迎えましたが、LINE等を駆使してだいぶ連絡がつくようになったこともあり、2025年5月に9名で遅ればせながら「還暦」クラス会を開催することができました。

その際、相原先生から「自分が生涯何をやってきたのか、ぜひみんなに話したいので1時間くれないか」とお話があり、今まで執筆された著書とレジュメを用意され、『日本古代史「2つの80年」に思うこと創られ、消された古代史三点「日本書紀」「魏志倭人伝」「古墳」』をテーマに講義をしていただきました。今思えばこれが最後の「授業」となりました。終了後の会食の際には、低音の良く通る声で得意の「詩吟」も披露していただき、旧交を温めることができました。



【写真】”授業”の様子

テーマ 日本古代史 「2つの80年」に思うこと
 ～創られ、消された、古代史～ 三点

I 『日本書紀』 II 『魏志倭人伝』 III 『古墳』

戦前の陰はいまだに色濃く残っている
 目次

I 『日本書紀』は 恣意的に編まれ(作成時)、読まれた(近代)

『日本書紀』を「ありのままに読んで」見えてくるもの
 古代ヤマトでの「王権消長」の実際
 ① 全体構造・神話の混在・「系図が語る『日本書紀』の真実
 ② 近代の我が国は「万世一系」という「虚」の部分に執着した

「大化改新」(日本書紀編者)と「明治維新」(近代の利用者)は 双子の兄弟
 ① 「大化改新」 当時の王権(蘇我氏)から新興「男大迹王(継体天皇)」系への流れ
 ② 「乙巳の変」→ 中臣氏主導で始まった天皇制創世への足がかり？
 ③ 「壬申の乱」→ 新規「天皇制」確立のための主導権争いの後→
 (大友天皇子の排除)・天智の皇子と天武の相克
 ④ 「天武・持統」合同による新王権発足への競争から→
 中臣鎌足(藤原氏)による天皇制確立への道
 ⑤ 天武天皇側(高市皇子)の排除を経て→
 持統体制への流れ・神話の整備
 ⑥ 古代国家形成への模索 持統体制を推した藤原不比等
 不比等主導による平城京と古代天皇制確立 → 「東大寺・大仏」の造営

② 「明治維新」 近代立憲国家としての「日本」の船出
 ③ 王政復古 → 新政権指導者による「勤王思想」
 ④ 歴史の創作→ 「修史活動」と思想統一

II 『魏志倭人伝』という本はない

① 「魏志・東夷伝」「韓」条での「倭」記事のこと
 ② 中国文献での「倭」記事と「記・紀」にある「大倭国」「日本国」
 そして近代命名の歴史用語「大和朝廷」へ向かう

【以上I・II 拙著『新編「日本書紀」・「古代史の病理」『捏造の日本古代史』など】

III 日本各地・古墳の実態

列島各地の前方後円墳は「大和朝廷」からの賜物なのか？
 ① 「箸墓古墳は「わが国最古の前方後円墳」で「卑弥呼の墓」説の真偽は？
 ② 「ヤマト」の地の古墳群のこと 佐紀原列古墳群・大和古墳群・馬見古墳群等々の実際は？
 【以上III 拙著『古墳が語る時代史の「虚」・関東古墳散歩』『東北古墳探訪』など】



【写真左】“授業”のレジュメ【写真右】“授業”をされる相原先生



【写真】相原先生を囲んで

金井高校生および卒業生の皆さま。ご関心があれば先生のお名前を検索してみてください。先生の経歴と歴史作家として執筆されたたくさんの本が出てきます。ご興味のある方は、ぜひお手に取ってみてください。図書館の蔵書となっていることもあるようです。

ありがとうございました。

相原先生のお人柄が偲ばれますね。
 会長の森も3年次に相原先生の授業を受けていました。「現代文」でしたので、源氏物語ではなく島崎藤村の「千曲川旅情の歌」でしたが、やはり同じように声を出して読む場面がありました。そのため、やはり「小諸なる古城のほとり…」で始まる冒頭は今でも暗唱することができ、実際に小諸城址(懐古園)に行った際、その景色を見て感慨深く感じたことを思い出しました。
 「金井高校新聞縮刷版(1995年発行)」に相原先生が初めての著書『文覚上人一代記』を出された際の記事を見つけましたので、先生の著書リストと合わせて、参考のため掲載させていただきます。

「金井高新聞第8号(1985(昭和60)年10月17日発行)」での、相原先生の出版に関する記事

相原精次先生(国語)の書かれた本が、近く書房より出版されるようになった。

文覚上人の生を描く

相原先生初めての出版



相原精次先生

題名は、まだ仮りの名であるが「文覚上人伝」。値段は、三日前後の予定。

四年前頃に一度構想がまとまり小説を書き始めたのがきっかけ。しかし途中一時資料不足のため中断。結局小説は完成しなかったが再び今年の四月、今度は書いた小説を参考資料に、この「文覚上人伝」(仮りの題名)を完成させたと言。

文覚上人と聞いても最近では知らない人が多い。伊豆に流されていた源頼朝に、平氏打倒を勧めたといわれる、伝説的に知られた人物である。

相原先生がそのような伝説的に知られた人物について書く気になったのは、何よりも源頼朝に興味があったからだそうだ。本の中では、現在伝説とされている事柄を史実として考えられないかという観点から書かれているとのことを楽しみました。

今後相原先生の希望では、これからも趣味として書いていきたいというところ。構想はあるとのことだ。

なおこの「文覚上人伝」(仮の題名)は、一般の書店に置かれる。

相原精次 1942 年生まれ。
 主要著書に『文覚上人一代記』(青蛙房)／『かながわの滝』(神奈川新聞社)、以下彩流社『みちのく伝承』／『文覚上人の軌跡』／『かながわの酒』／『鎌倉史の謎』／『神奈川の古墳散歩』／『天平の母 天平の子』／『増補改訂版 関東古墳散歩』／『東北古墳探訪』／『平城京への道 天平文化をつくった人々』／『古墳が語る古代史の「虚」 呪縛された歴史学』／『千曲川古墳散歩 古墳文化の伝播をたどる』がある。
 (“国立国会図書館サーチ”より抜粋)

※注:記事中の画像は、写っている皆さん、及び相原先生の奥様の許諾を得て使用しています。